紫文製錦

雜二

五

雲文叢稿五卷 目録

卷二

容顔 初十 廿五
人情 廿五
懷舊 廿九

紫文製錦五巻

安藝　源　稲彦　撰

雜二

容貌

相壷十七ウ

絵ゑかゝける楊貴妃はいとうつくしき女しといへ
ども笠かぶりありけれバいやさまをかしなり大液
の芙蓉未央柳やなぎもげにかるもたるしかと
ちゆかうめいたるようもむかるうつくしうあり。

更衣のさまのこと

すつうちうたびなりしかおぐしいぼるる。祝宴

れ又にも祝まつ。よろこびきかこゆるき。

ロ 廿丁ウ

○いみしきものくふあるかる紙すりともかんくいぷち

忌まれぬべきさまのしあへれいえさしたるちあいび。

ロ 廿七丁オ

○みぼるしもむあつるぼるつきかれぬるかもさまるへ所

もんことのそげなるへ

ぼむことをそげうう。

ロ ウ

○いかくかうきびもたるかどいあげおとりやとうたが

ぎりくおがされぼるへ

はしくおがされぼるかあきまうつうげきそひ

ぼ事人日。

第木八丁ウ

○ものきれ源氏系のさまと

ぼけるくきまなるあむて。もなびもうちするうもを

ぼしあつるにかかげいとぐめぐく女まて見うそまぼ

らまかし。

ロ 廿三丁オ

○おかうふれけしきむとのけをもけざやかにけざ

かくみぐしたるあまぐらびなかまれうふかの人こ

れすてかぐく必ういでしまあぐもとにたをはまれぬべ

けしをおかしもれうこ。

ロ 四十四丁オ

○すれかのなうほどよたてるかさぼれくこうる。

かのうるはしてあつるにありさまは公にもむだるを
おとゝへるすきさぶらうどもあり。
〇おいさあやめむとへがさねあり。なにてうあふむう
へにきてくがらはきかうやうよちむさ地人めものげ
なきすぐうちうちるかなどいさーむうむーくむを
ぐにをわざとかゆまぐうもてなたりふつきやせ
やせうくいうう記きかくーたり、いまむとりハえんがし
むきまくのこるやうなくこゆもろきうすりのの
記とへがねあるあるはこうちぎだたれるいぐろ

にきまくくしなるはたーむきゆるさはまぐ脇
あくはまをうぐくなるりくなーまりいとちろう
おうーげまうまくくとまくてうぐろうなるむをはうら
はをこむくひつきまれあざやうまくくらつきいと
あいぎやうづきをるやうなるかこちなりかこはいを
まさやうてはうぐくはあくまどさぐばくれなど
いときまげまずべくいと紋ちはるやこうなく
おうーげまる人とはてきりむべくうおやはせまる
くはおるまくあやをおうくくはんのあくちぐなく

ちばなるけをうへだやとまとゐゆかぶるきよ
はあるまゞ。
〇すさいしたれるさいちして。鼻あどもあざやうなる
（口五オ）
ゐるうねぶしかくまおいきやこゝろもゐてびゐこ
（おいせミく）
たしば。
〇ちきうまるうちぶいとこゝもてつけ
（彩殆萩し）
くおれまさるれとまりいこゝろあくむとあぶごめ
たべきれまーたゐ。
〇よぎいくしくあいぎやうづきおうーげまるぶいまく
（口ウ）
ふきうるうちをゆくわくむまとうばるれしばるれ
おおくゐんてさるかるまいとおうーきいをとざままり。
（タ臭廿丁オ）
〇ちろきあをせうするをれるまくうなるをかさまてを
なやうなるぬすぐいおらうたげまあべうるまいち
ーてそをとやうたてすぐれるをとなけれどかう
やうをたちくやーてあれうちいをるけををあなん
ぐまーやたぐいとらうたくんゆ。
（毛宝ハ丁オ）
〇なるれちーらまりぬるくげうくれうへに紙紙
おきくいとなやまーげまるこぬるかあまぎをだくいを
やはゐてびゐ。ほ十あまりばうりにてびいとをろくあてる

やせられどさすがにつきもよくこまやかなるまことにむかうどころにたうつ
くしげなるうがれるすがたとなるくなどきこゆるもちよ
るうゐまあうきさりにかなとこゝろよしあり。
ロ（ウ紫上）
○十ばかりよやあるにむとかんてくゐ白きてぬやまぶきな
ゐはなかるるきくばかりにときたる女ごあまたみえけり
さぶらへくもあるべいうはこさはんてこう
つくしげなるかたちなりかたちあざとえうばるる
やうにゆるくかてかいとあかくすりなくく
たてり。

ロ（九オウ）
○はるつきいとらうたげにまいれたるうちにけ
つといたはけなくかいやるるもとりつきうむざいと
うしはくゐ孫むゆるむさきゆるくさ人かるどとやて
まりめり。
ロ（十オウ）
○をさなきたちてとさすがるうちまもりてすわに
ありてうはそのたるるおがれかたたるかつやと
めでたう見ゆ。
ロ（ガ三オウ）
○たぐあるかきたるるめくゐがざんめやうちすあ
られくうちみでろきあるとくくうはー

ゆえかむぎーい髪の
さーぎきとゆーくま
て。額の係ゆ頂の
かたへ髪の生のぐり
さぞろはのさまとゆ
えなるとらつ。ねる
小柳ぐくり。

うてうれしくおもへば
□三十ウ
○すこしゝかくらかるまりあをてうちおやゝおも
やせゆへるをこぶげるにろうれるくやでこゝ。
未詰花世ロ十ウ
○まうぶかれぐるひれどゆきれをりにこぶいとぐきて
らよわろうれてまゆを老人どもをこさろえく
見ゝてまたろ。
□未詰花芝ばうまゝ
○まゆみるぐけれろうをぜるぐよ見てあるさし
をとむねつぐれねうちつぐてあるかくはと見ゆる
もれば鼻ゆりをとめろやまるゆんぐきち

れのうものれおぐゆ。あきまうゝたうのゑゝかる。
きれのうゝすゝたうてをづきたうとおれのうう
にうゝてあり。ろハゆきればゝくちろうてさをる
ゑゝもひつきさよるうはれうるなれちやがちなる
おりやうハ大かゝおとろくゝくなるきるべゝや
せるへうとうとゝ行ゝゆるさゝぶをてかれ程ハ
いゝゝ夢ゆるゝゝあくきぬのうへまでゝゆ。
□サユイオ
○紫れ見。いゝもうつくゝきかゝおをまくゝくれなる
はゝかうるつゝきもあり以と見ゆるむりんれ橋の

ふるまがなるとかなさなるてなるんとすくてりけ
ものさまいうらうたしさぶいけおいあの名
殆にくたぐろめもまぐりけるとえきつくろは
せあへしがいま少けけぎやるなるたるもうきくう
きうるなり。
仁系成八十才
○いとうあるさまて、いろめうたるもむまくる
と女まくるんむおうかりぬぐくへもしずらうそま
けるのまもかくむつまぐらおがしあるむてこまや
うにがりめぐるまどきくすまるとさけれさるれ
殆ばあのこ

つるうさいとなるうくうちとけあつるとつかるく
たしとるそうてきけるうあ知てむるまとおりまくで。
女まてるんをやといろあきたるだんよおりわん。
月十八三才 ほぼ三のこ
○あとけまくうちつくくまつるぶんくきあざれきる
うちぎすくうたて第をあつくうふきすきむつくのう
きあへしれを女あるあけるの花れ家にめれくるさるたて。
ろ知づまるさるうけくうらうたげるうあい
きやうさぶくやうておうまぐるくも後つ弱ど
ねなまうくかりけれしが例なくぶうむきあつる

（保氏記の）
へ〜けのうつ〜いわく。こちやとのまへどおもうらび
ハりわらいうのとくちすきむくにおわ記ーまつるさ
いうーうざれてうつくしあみにくかくるふくちあれ
（保氏記羽）
あ記よけるあ凡ろあくいまさるきさ〜ごとく
主
（保氏記の）
○ものすうれ記きおどうーあれいかいがりむえなる
ず絵うきたるとさ〜かくして凡かつたるまこいうこ
（保内侍のきすうう）
のべたれどまるばいくいく思ふおちうていうくそづれ
うげうう。

花宴十二オ
○さくらはうるはきのがなり。えむうめはちうざさ。む
ひいとなるくむさくみぬ人をうへのきぬなるよあ
ざれうるはおきこすぐはまるるいくいつうれいう
あへるはさうげよいとおかなうの花はすおむもけちれ
てなうくおとざきーにな者。
芸十一ウオ
○娘ぎこもよいとうくーげよつくうむーておいす
（保氏考の）
をうちあこてれそきはうるよ
ロ 廿ウオ
○ものろきれうげよ久あむいとをるやこてがぐーと
なぐうあちうきさ久むきゆむてうちうへうるとからで

てうらくげまかまきてうかてうかくおくかう
ゆしかなるべし。
○ げまかくんかきはるがかぐ。うう〳〵つくき。
○ 余てうてうきゆれとく火ゆうちなどあまつるま
こゆ。うちゆしかまつるわどうめでこき。
○ 女はかさきもげてうめでこきがさうなるおりう
かかうかくいつぐあんおくうまきわうぐる
さくちーてこまりーきはゆをむる。
○ まんぐちくむさくおとをめが為てきかはとく

まうぐはおつしかはづうとおうげてきすぐまうむきと
まつうはぐーいゆうくやきうてくまはなたうげは
白むまつうきをおとなむまにかぐかはうをを
ねきすべまつうはんはまをくちくははうちくうて
為こまつるかをううたくきはうくうてまきう
まうーうきうなり。
○ まいうちみぐれまつるはうかはまうむにうはは
なくはゆうまりはくなりーむとくをきまつるす
きまつうをぐつきてうこゆをを光

たるもろ世どもなど。やうく見ありく。涙やとゝつく
ぬるゝり。
○いつもぐるめ月いとあるきるゝ。とゞなまあゝうき
（ノ九十オ）
ゝにく。物がおがるさるゝ。おかるゝだよ
もなきぬべゝ。
○女房かゝいとあるく。匂ゝくあがるゝりめ
（檀陸ミ十ウ）
あゝざやうゝて。涙さおがしかるをよろぼのつみ
わすれゝゝ。袖にらうたしやゝむせゝる。
○世十オ
○やゝいくらうなゝ。ちゝおかやなゝのかけよ。

もゝりやゝ行りて見ゆ。ゝやとおゝゝて。やゝ
ら。本丁めかゝろゝむゝ見ゆ。ゝ人ゝとなきゝど
めかゝゝげよ。ゝゝいとおゝゝげよ花やゝよゝゝく
ゝりぬ白つる。ゝまかきたゝむさまゝて。いゝうゝも
たゝめなゝり。丁めの東おりてゝゝゝ。ゝつゝゝゝや
なゝんかゝ。ゝ本丁めゝおがけなく。ゝきやゝゝゝか
ゝゝ。ゝめゝくめて月とゝゝ。ゝれゝゝつゝゝえつき
て。いとゝ物かゝゝとおがゝゝるさまなゝ。えゝゝゝゝど
いやゝうゝゝげゝゝゝむと見ゆゝゝゝゝかゝゝゝゝど。

からつきけいむあてるけごろきもけうこれる
あいぎやうづきあへるけもちるくんてまへごろ
もとなくゆうきるもきばうのこまふりのをとお
ずしかへん。
○孫なさかちよい（菫生十一才 赤松花月）やぐおりしあばごろかいたぐ山
人はあうきまはたこれとちをかやよちるるねとんて
まふ。ひろうばやるどさ。おごろけはは人のんまりゆる
はすべきにもあうずう
○人へくもかとうこいるがれ。ちぐこるねうゆ出て本（松風十九才）

丁にちるかくれるかこうあいこうなまあくこはし
ありたをやぎたるけをみこちといちもはもた
つまねぐし。
○ひさしぬきはすうまでなまあうこうあいぎやうはぐ（ひさし十九才）
れいぐうあなぐちなるんまなるべき。
○さいはは美ようあるはぐあまうぎはかどまてゆう（さいは美七十才）
ゆうとめぐるくつうはきまははうをりるうどまぐい
へいさうなり。
○たぐ姫ぎこはたすきゆえるまあくるむはは生ぐうは（たぐ姫十十才）

くしげきうをむくひとつる。

少納言十八オウ

○姫君はさまのことをきゝつゝそうてさうれ

はと記きすゝめ給ふ。

にはかぐれさうばかむざなぬて

にはまあつきとうちまりもあへぬをちぐ〳〵をてすこ

しうばあるつるかゝあつゝ先きうたくしげをそ

ひゆれをきいうつくりたるもけこゝちするを。

文もかざりなくかゝるとおがたりかきあるをゞと

記きすきゝ記まひくすやをあ記た。

玉髪十オ

○文こゝ十ぢりなるものとれたけうくゆくしく

よりそ。きゝとなげあけれど。拾りむまうゝをまくく。

あくくうなるあるまゝ見るもゆくおかゆいろまゝ

きゝちるなげよゝ。

ロ廿二ウ

○なるるようたくしげするうゝるれゝとゝやつれく

うぞきれ記ゝへやくもれをさきゆあゝるゝれすきかげ。

いゆあゝくめでくゆきゝるぐるゝうかるゝと

見ゝそまける。

ロ廿六ウオ

○紫上へれはうゝちゝるかたれるゝぞゆつゆゝ

見ゝゝ殿もすぐれゝゝと拾ゞたゞるかゞゝとゝいでく

はるのよのうかれがごとくにうちよりこのかぜにあつまるこゝろのうちにはゆめのけぶりとなむたなびきてたゝよふ。

（伊勢物語第五十九段）

○ゆくすゑとるべくもあらぬ。

（紫上）

しまがくれありさまどもいとゝうるはしかりし。

二十七八よりはやうやうさうのきこえあるべきを。

（初音六ノウ）

○さうじのもとにあるはしげとゆくすゑまでさ

りてくるやしるべつるはるのちなどいとゝ花やうのこゝろ

くりかへるとんゆるゝところなくくまなく匂ひをさそ

しくかんまりしきさまどもあるはしるべのあるはこ

ゝるべつるおとゝもおもわざるやかにもすこしほゝゑみは

らるゝかゝるもいとゝもいとゝもさよげにおかしうこゝ

ざやうるさまにあつるをかくてゆるぎてまかぬ

りかたをつけくはへてもんすぐしあるやう。

（ロ十二ノウ）

○いまはへさうとゆるしてはわづらはしくもあるかな

ろへゆきまゝにて流れよりくもぢぐしゆるはう

りあるべきをいとおがせ給まゐらせむとおもひたま
へどやあざいびこころすきまかりけんかたゆる
もきなくあくるおとなるべくもなく思
さかいもりはさぶくくもるるおもてのさる
はりのかくうちきばきあつとさむげなんごろし。
かさねはうちぎまどばうすなりとるるあるむ。
はなやかいろどりの裏ことまぎらまぐく花やなるる
ばこころよあぶうちなびれあるおくあとさくる
ニ本丁記きはくるを落ます。

夢夏ナ九オ

○はいさるハ。はいまるる物ーじゃうくてうとあくはすき
ぬるりあり。おはくーきさるうむておりーろこ梅の
ちるみれおるいけうしたるあさかりはおがてのこり雪
かりはるうるるこあるうるるるいなりはゆるるん家
ひとあり。

世分十コウ

○あさがるみはるるちうとあでくる物ーじゃうう。

ロ　十三ウ

○敷はうくこるるん見あるくるのむくく中将のあ

原氏三ウ

さいはれすぐるいきまはりなたゞ今いきむとなる
べきなるはかくくなるくるんとんゆるるんはやるるや

人はおはれるやる。
あくるるる

あんとて。わゝはかゝいみりがくまとゝ丸まゝ。
○日（十五ウ）花やうまいでるなどけぎくとゝ丸きまゝ
なるさきゝてゐるもつり。
○こぎく（ウ）もうちあまつまいるあまつ
らつきまりやつつきまるやうまゝくゝまゝく。
かゝれかゝれむきくうけくゝうおがゆまれいとあ
まりわゝゝうなるゝいゝもちるゝくゝ丸てざうる。
うゝかゝゝさゝあゝんけくゝごゝとあゝゝ。
○かゝ（廿一ウ）ゝけるさゝ花くゝれ橘山吹といとゝまれいみちゝ

花とやいゝべうゝむ。林たゝきゝ本ゝりさゝ花かゝりまゝ風
まゝむきゝるまゝりゝむゝかくゝうあゝかゝとゝおゝりむゝう
へゝらゝふ。
○いゝけうけくゝけまゝ。（茨東集六ウ）ゝくゝまれやゝうなゝるけあゝりきゝゝを。夢
ゝてゝちゝゝて丸ゝなゝるゝも。滅のゝゝやゝゝまゝゝぬゝゝゝゝゝゝれ
ゝゝゝ丸てゝざゝりけゝ。
○ゝゝぎゝゝゝりゝゝゝゝゝけゝる日（茨集上五十五ウ）（保武天皇きまのゝゝ日のゝゝゝゝゝゝ

はまてとれつゆ　ゆ　ゆ　

おもちゝてゐまあらうおやしげるの。
口廿九オウ
○あそれのあり すくるまさせるおもいでせくきくるお
そくくるきかるのへいらとんやすくうらやくく
たくとあてちろうつく
口廿十オ
○女はせえるちもちみどれるうざるやう
けつさくけうおうまもすくれくも
でたらしもおハせびおはさいとあてるるうくあ
いきやうづきまるけうそう思うちなるまとそいと行
それと思てまの思をなるやなかとうおげく

たりかゝをでいまたなぐらまなおねどるよもつく
きさるもやうもそるしくかそりおうきかざまう
口廿九オウ
○あざやるけづかきもけうるおたうなまあい
ちり。
口四十四丁オ
○あわしすぐるいとあざやうよてをげちものく
ちうそうろうるよづ凡てあをけ。
横留五丁オ
○ちろきうすものよかうはこもむの紅梅はばず
けいとおうくちどけなげよをきやられくば家ハと
あうはるくうとれ沼つよさるまあるさまは。

きいれてとゐしどいとらうらげよもろくうぎやる。
柳をゆづりくはそうきもむやうるりかしらを月
くさくくさいとさくよいろどりたるむこちらしく
につきうはそくうう包むまみのびくうよをづうう
うをうくうるゐどは。ゐかいてどよくおもむ出くうしなど。
かしいとくやうよきいをゐくるきくくさゐ
りれをいくぐくからむ。
夕蓬 にしたいウ
○ゐはくくきおどれゐるかいよ。ろさまやうるゐ御
ゐどれうちゐいとけうくすきくくかげよわりくゐ

夕日は。さすがゐよりろもゐうさくくさくるゐよ。ま
ばゆげゐわざとゐくゐふさとさくくかくゐまへるゐ
はきき。女くうかうゐあまりけれうきどゐよかうは
あくねをとゐくくまはる。
夕蓬六十四丁オ夕蓬の源氏君のおまへにまゐりたまへれば。元服式のまのくゐみも
○おまへにまゐりたまへれば。はきさくくけ
れどゐよかいきてどかうゐもとおどいくきどうちまも
夕蓬はきもを源氏君のをびゐうき。
ゐまへるゐいとゐてくきくくゐよさどろさうゐね
ゐまきさりゐまへるれさうるめれさるさまはすきどを
ちゐゐもくゐ人はりどくべさまもくくゐいど。思うくも

ちこゆるべくあざやかなるものさるげなわらうざら
よ自己をちしあつり抱おりむらねわらうぞの
かぐらまちおハせぐかくふるところあるうねむと
のつりあつるおとわりぐ女まくるどろめてざら
むかぐらを見くもあどろおごうざらんとろぐかみ
あぐらおかぐし
江法十一丁オ 紫式部日記
○ちくようやせかうりあへれどかくてこうあてる
みまあしきおとめうざうあさもまきうて絵で
ちうりゆれときこうかるあまり自己おかくあざく

白文九丁ウ
○ちくれ君ハまぐらきる世ぬおぐくいとすざく思
義考
ものあぐうるまくなどぐ抱ゝあふげまさる
べくくうとせ世ぬ人とつくいでざりけるかうる
やとかるかと見ゆるとうむまつりかうかうもも
ぬくおハせさうハ世ぬ花ぬをうるもよ
うへくれ自己を張もるくらうこげよおうけ
なるぬさうて。いとうろわる世をおうむるへうけ
き。似るものるくさうろぐるくすぐろよりのがる
ゝ。

うこたちとぶいぢこのんすぐれるあるさまとゝ丸
ゆるゝるもあるさぐ　すぐ　ことあるまゝうちづゝげる。
んれおくおかうげなるけを記れ人は似ぬなを
けりうぶうぶ　さうは山世れるれむるびあやき
まぐうちつるまむあへるあるとふく通るる
ほぢれお記ぢぜもまとる百ぶれうもかをうぬ
べきさくちゝは　ける。
○かくかくうんあるるまぐうち恵ぶむたちゝふもあ
れくまもまるさかれるれかくれあるまぢさるよう

るさかくをきくをうもつけあねどあまるれがうう
えはるようづりれるうれくもれれえのいはは
もあ紀角むをくはへおまへれ花の本もはうるくうて
かけるあ柿れるれ　ふはれ　に　にれ　に
むるむとおかくれれるやなきふぢ藤もを花
れうをりかくれるたうきお記ぢぜさとるをう
なるかくるんまさうける。
○姫ぎごこはいとあざやうるけぐうくいまゝきま
しあむくけるまぐ人まくん名ふばけるうぐれて

まゝ、さくらぬかうるまぐ、ふがきまどけそうるまあむる
久あむむけるたくきうどるまさなるる方すうまぐ。
あいぎやうけいこぐれおけるやうるんひるばめくなし
るどもらうくうさるをづくきけさへうむこま
へつこいまむとほハう才紅梅よれぐいろるまく柳のい
ゆけやうるたちくとんゆこうむやうるなまあく
うすこるるさまくおりるるんあるきけをこはま
さりまへしどるおむやうるけをこハさよすくとどん
おりへる。

つ嬉恋いちうくくくおるうるんとまつわこハ
おかとうるもらるけるるきまくて物づくしたる家
ちむこいとうたくくうきまくるおをす。
推本に十三丁ウ
○くろうさあいをむきるおすやうるる久あむと
きるへしどもれいきるつくうなまるきてあいればるん
ぐすうるおかゆかこきいくるるやどるおちるなる
へくすこるすこるほうくいろるるいあるひをい
だちくいとおくばいとをるかけるやうるなるむる
さけのくるるまかきるる紅とくるるるあへるる

つきやせくるべだちてうきこゝろさらぬ
ぬく行ばそうあんまるとあはこやくるも
たるいとあむきやうつきて
袋角 四十九丁オ
○いうしくおうしばるとてむまつくろ
まつるさまをまたまてたぐもあじとおもはばば
ひとき人をおかくあはめるばいはあら
じめくちようはしめて出かくちるまきのたりとお
かさるはば山里ぬを人とまてくちつきるばげ
にうちあらたくかくあんしきはあるきるなめ

なるきはぬむとのんをりたまきしるばいうは
をうまるまはのやうるはかくせときてつ
姫衣はこうとあやしくむぐくもてほ
ゆ
○山ぬ 四十二丁オ
ちぬまかにうつくしげてうぎるくいつきする
たうん姫ぎこもかばうるはおいすべあしかおも
むすぬ吾うきぬいとつくきぐうは
まやうる角記などうちとけてんまりう弁

くるまちん。

早蕨三丁ウ

○いとさうにに白むおやくおいする人ぶさまの
清りの物りひとをもらへうち物を宮さま人
るもいとあてなまうへきけーきまうてむ
うむとるとおがーまつ。

宿木世八丁オ

○えへい。女ぎとんばあるこさたくあるい
とぐれこうろぎーまうよりおかさうれおど
なるむとのやうにいぶきまびのくかうむぎうう
ばうらつきまとうのうとるあかなあくく

たとえて白むあるえあむあるまうむ白む
てりのくくひがうきかれまうとどうげ
にらうくうぶうすぐうるるどたうむくかうち
よきむくいたんるあはるーまうるるむと
けうるぶあまうあるひのさおどなうう
孫いるとなうあるあぬあきやうるさうれ
れとえて白うかぎうるるかづうきるう
かくれなんびおやといさうるまぶるーー
あむつぐうひうたびやうーうるあいぶやうぶき

らうきまとうがのこいはぜうこいまぞおがみ出
らかるりめ〳〵まめ〳〵ぐまどらこもめんど
まこあまりおぎつなくあらびすぐこいこと
こうおくかとくしげすう
○れかちこすこうこるなかれも
ちのよちこれおむのきのちるおどだこと
あこるまざかこうへをけらこてもこあいざる
けれいかづしくこうおどこう
○えこひがこるあるとどもこしん

○ちこ

こうぶれらこるむきまつるさまうへをたらむく
見たてまちこるけおやこもこんこびあるおう
○ゑなど少こりせさせくたぎるまちこばこまをてこ
のよむこうえたちこそこあいたこる
いれくこんつるやこきこるまちこんゆるなく
おまこるおうけすう えこひつきまこれうこるる
ここらこていとおやこるあてきいたこかとのこ
おりむいでこるれいたこるめもこがこわたまをて
いこあこれかるこうえこれこるこうこうこもあ

四しけうすうあんん

（ほ五十三オウ）

○きえいこいかもるを

これはあれかうとる

まあきくたいけ

（世十二ウ）

○あしかわりなく

すくいとあくもやはーまこびるるすわれ

あうとうきぐ

（世十八ウ）

○ものもとくろせきとうせるなるべき

ほどれはるぐともなりなすべきをあひてー

うばやうやうすぐつきいとあけうぐきつ

くうもくくうちとけるさまをいとさづく

まづゆきまくきまるるとしつるよ

やおりへとまぎれんうもたーめぐしさわぐな

ふもろきかきりをぐるすうれおどま

ぐなまあーく。ろくくあまこかたんどう

もおーうきかたーたう

（三六十九オウ）

○けーきなまくあかよ。秋のきよ

ちりたるこのうれ。うばうばさまどたくんん

四

○切いけられて。なかいきんを。花はさき
ちるべくちる。こゝ

流

四ウ四十丁ウ
ちりぢりに。ものとかろくとぶれぬ。
世ウ九十丁オ
○ろうこちとゝなく流れおぼたるとゝ。ゆ。のごとくに
して。こゝ
柏本世九十丁ウ
○いかづちくちるときゝゆるまく。彩はもばく
にはとるすゆ。しろくあり。

人情

夕貞十二丁ウ
りの情ちるあふぐ。花はもらげよ。なかやすら
はまりきるや。
記茅窓世七丁オ
○ちとゆるきすぐるて。かゝりぐりあどうちゆどわ。ぱは
ちゝんうゝろ。おりみいとをこなるべしとおぐ
しやすゝ。
莫世十丁オ
○ひまをかゝへて。あいうゝんうきめをんせあゝ
なゝくりのもきまくあびあきこのへばきいきいと
わげゝちゝくをぎゝしげるはまゝをゝとたゆげ
に見あげくうちまりの冥くあみる涙のこゞふい

さきんとゐきつゐぐゑれけおきかゝん。
○いとはゝしげ（廿二丁ウ）（葉末）
てあるるるさきるけーきるくゝゐまへるきるぐいゐと
らゝゝじるん。ぐるーげすりゐぐけぐれしるすぐ
りゐくたゝゝかるゐ桂けゐどゐりぐきまで
見ゐれいとゝ（源氏若の心）ゐるゐおゝとゐるぬゝとゐりてゐりゝを
たゝんとゐやーきまくうちまりゝかのよ（葉末）
（廿五丁オ源氏若の心）
○いときゝるげゝうちゝこうゝきくいでゐゐとうるよ（葉末の）
ゐいめゝゝぐゐんいゝゝてすゐゐり。

（葉生十二丁オ）
○さてもかゝゝゝ（未摘花若の心）ゝゝゝ

ありさまも知がほにけるる。

保氏云 あだちの三郎はうちるがく月てはいまきう宿

れもうなりぬれ。

○ 廿四丁ウ かくあやしきことざまのことは。おきかなきまで。

書物忘者の女房の保氏云 女だにもろくもあるべくうむうるもとむきてる

ろうぐさきさいける。

絵合五丁ウ 秋好中宮 ○うへいめはしきえとまのうるもとさまかけ

ゆ ○うへいめはしきえとまのうるもとさまかけ

れいぶとうつくしうはきろはきえておいまん。

などうりはいうきうきしなをうぐを思う。

女三宮の御へげん しちの御ゝせもと おのくゝ。

○ 五十四丁オ 風うちふきたる秋はけしきをひやうこうとえ

ゆ ○ 紫上

ゆ ○ 紫上

ゆ ○ 紫上

紫上の。なくなり給へるもとりあつかひ給へるなり

ゆかはおろかなるに。（世ことの心）扨分はたゞ（源氏ものがたり）元と心まろかれはもて固
に。ゆとりはおとるとねどあまり心つりなびかれ
はんだへもつゝみおとろへうんさもむ世を見たてぬ
さはなるおろかとゝむきゝ〜がる心たゆきうく紫
〜われどさゝ〜きやうやおがさんとはくまれく。
ちゝぐ〜くもの宮〜まいぐ。（ナ　セ十三ウ）
○まゝこいくうきさるつけ〜きすり国もかゝ〜て
まゝうり（柏木し）紫つ稚わづあやゝきんうゝ紫やゝ（世ことの心）
いとさゝもちるかゝねまほれけてるいきく

（世ことの心）

ふゝしあるるかるとめをぐむ。
（柏木九十ウ　源氏ものがたり）
○世ゝうろぬうちよ。あるくちをゝやおりむまぎう
かゝるくて。（世ことの心　源氏ものがたり）こゝをまゝうかいめぎゝしくうゝかゝ
ゝ紫ぶせと。紫とよ。はけ〜きりゝぐとおがせばゝ
（ナ十オ　源氏ものがたり）
○さてもあやゝ。わづよとゝりよおうろゝとおる
紫ゝとれむゝ紫ゝ。此世ゝくかくおりむうけ
ぬおゝるむうちりきめんばほれよのつゝをすし
かろゝるんやとおがゝ。
（ナ廿ウ）
○大カゝとれ世のさゝあなさもおがゝけゝぶけゝ。
（源氏ものがたり）

まことぶれやろくとさがしわるをけ（紫式部の五十日の祝ひ）ハあとにてすべ
き日をとと物（世一ヲオ）（桜木と女三宮のこと）むかくしあむくゝ
○さいけいとのんもろ物と（女三宮のこと）女房なるもあるむと
ちゝぬこゝろ物（源氏の君）なるけしをこゝろとろむとやすゝ
じおがせとわゞ（紫式部）ぶゝがることをあへん。めるけいを
むよは。（女三宮の）女房ぶゝ
えよもいゝ
（伊勢六ヲウ）
○さとめしれ者をけのやんきてゝよべきわちゞめ
なゝむゝのゝおがゝるしいさゝもやてまるまゞきゝ

（源氏物語。主人公ハ光源氏。母ハ桐壺ノ更衣。父ハ桐壺帝。）

ぶゝ
（ヲオ）
○ふゝどりゝあいはるゝ
（ヲオ）
○紫もうへハ
（ヲオ）
ゝろけうちよおがゝゝゝてゝとおかし
ぜさゝゝけよまゝんのちゞのあむいぜゝとゝ
ゝだゞまべての世けつもゝきあゝきまをおやゝゝ
さいとずくゝなゝるゝのゝゝあきゝゝよいあゝゞのた
まむまゝゝゝるけをむゞゞゝゝおとゝゝ物てんまゝも。
あいれゝゝりのさゝゝろがゝゝきけけゝきハもゝゝうえ
けゝゝ。
（自文十一ヲオ）
○かくあやゝゝさまゞゝ紫式部の人物ハ光源氏ハ

る（自天）を兵庫にて見るゑんさいどくるまいどまくおがし
くぐるかいわざとろぢのすぐれるうつをしめ
ゐむ。朝ゆかれかいとわざるあいせいとあこおきへれお
裁にも。まいうりれ花ぐれをなどゐあむあきハ。
世れむとのめけるる女房花さをしれつまるすゐる
蒔れつゆよもをまくにころうたしゐいだを
をわすくく菊よおとろへゆくゐちぐるまりのけ
なきわれもかうるといとすきまぎき裏かきれ
しろわむまぐ。おわすびなどわさとろきてう

にめけるおりむをゐんたてくおれまこう裏ける
ロナユイオ
○わぎとハゐくておれ人ぐるんせうゐそハかゐび
んくぐめゐむてん。初とれありきまをもんもるハ。
おとるこうゐるべけれどおがていとつくう
む。もてすしゐハずいまあくく裏しきやうるれ
おのこせさせく。初とのんをけむたうりおわくた
くりゐしゐ。
枝柿ニイウ
○ゐうきれちぐりれ。ゐうつるきだうれ。うきよれ
なぐきめいてうるこうるまるなくたのこからうたま

へり。

紙角 巳十九ノ十ノ 字佐の人家安房国

○さうりをたるさまもこにあざやかなるいたれば名く。

よはたゝハしくゝぬをさ〜ぬむきつゝ。ありつゝずとり

はくゝろむしる姿ども。はきゆるされるもあ玉。

大ゑ

見わゝしまゝ知ゝく。姫ぎこわしもやゝくさり過

ぬる身ぐうしかぐこをみれいやせくゝなりりく

ゆゝばおのゝぐ〜ハ古の人どりく。わしあゝとやい

おりへうゝろていちゝびかやよ。ゑひがこもむ

きかけつく。食どりたる不づゝ。ゆゝくゝてう

ちゝるまゝありわゝ。大刷 身にくゝ。まこゝとあれゝ。ぐ和ぐこま

ハあゝぐゝめもちゝ。みもなゝわゝと。おゝゆゝ。ハゝろ姫

しゝやあゝんやゝう〜ろゝくゝて。見出てゝたま

へり。

○ロ 六十八十オ いくゝ。ぬうちゝる。むきくゝ。おれいで。生るかゝろぐ

ばゝりかけゝゝ見てまゝりゝあゝ。あゝずめてゝく。

すゝうも掛へたゝる人と。ゆゝむきゝくゝまゝゝば。と

おゝぐゝゝ。ゝのゝぐゝ。ぐゝくて

ロ天 わゝくゝ。ぬゝんのゝハおゝゝもゝ。むすゝ。ゝと

るまくらことすれ。
ロ七十二ウオ。
○さすがに中納言などは殿ん所をおがんでと
はたのうきうりみうきなりけりとおもふまゝ
ニ
ロ七十一ウ大原
○よわき時はいくちはいとで世をたちとまるべうもお
ぼゝずもいけばげるゑとぐさあるねどおりつん
ゆくこゝろぐるしけれバきうぬやうまくねぬるをむめ
ざこゝろはおりみときはわきと同しうるねのはさ
まはいとらゝげまくかゑをまくらにくゝみて

まへるみはぐれはまりたるわどゝあゞがうう
ちくしげるとんやつゝおやはいさあいさと
はもかへすぐおりむいでゝれるまくかなゝ
けれバはゝこゝるゝこゝるゝ
いつこにもくおいはすむかゝるむゝへもゝくゝが
ういうゝく掛おりの角どとちすてあもて美
にぐゝよ見てまいわゝとおりむつけのの
ロ七十三ウオ
○初ゝ孫はさこゝ風はいとあゝさゝおどろきれ
くおきあゞりまつゝやまゞ人などいはやゝ

[illegible]

たゝんやうをいとおゝうるをゝくとしていきゝう
りのおりのべきさるもゝまへゝばかいえれ美
にゝてまへるいとうれおゝがたるけゝきるてゝはれ
わゝうゝるゝほのめきゝあれとかゝうたまへまば。
大系の心
いとゞゝくかすゝきうゝをゝくゝうせあゝてほいうで
い夢にもゝゝをゝむとおりゝをゝさゝるゝかうゝゝそ
まゝたゝゝねとゝゝゝてゝおゝがゝいゝうなきゝゝ。
九十三ウ
○ 袖をのゝゝまきゝく白数珠をゆれゝばかゝゝがゝう

[illegible]

ゝくゝあゝでいふくゝうのきゝゝげ
白文の心
になきゝゝるゝを女ゝゝばかゝゝゝばゝゝうゝゝりなんと。
おのゝゝゝねがゝゝゝゝゝおゝゝるもなゝま
うゝゝゝかゝりゝれゝゝゝくゝゝとのゝゝゝまゝも。
沼をゝゝきゝく京にゝゝゝゝゝゝゝとゝゝす。
岩本廿五ウ
○いのちゝゝゝくて。いまゝでゝゝゝゝれゝゝゝゝれお
ゝゝゝゝゝゝゝ

やうおりてことうすぎてあり〳〵とさいの
の名れうさ、そららさんかこまくかきうとおぐゆ
ふわざるりけり、
（廿六丁オ冊表の分）
○むこすら世なくまうまむう〳〵記どくう
はさうもされいい財くもあどかはともおりゆべき
をこうむうくれすていでもゆけうさまきこい
をゆくさ池こまかきこうけうろおくくこと
きぶわぐんまぐうおりをやるこなくけうらく
もあうなおのぼうまぐうへいなぶきくさあ

むこうをおりまよさうをばすて山ぬ月のうすみ
のぐうくれ〳〵おくるまるよろぼおりむうぐれあよ
れぐせれあさるおるもあうまかし山おろうよ
おりむくうれば〳〵いとのぐうよなろううかやす
きぐすまむうれどいうむいさもおぐくれ志れ
業れおとよいおとうておぐゆ
（中元）山里れまつれうげるとかくぐうう者にし秋
れうぐいなうりさ。さうかるいわすれよけるやあん
（女郎花）きうへうもあどいまそいうせか月乃るいみ

たべるものをあさましくもうけたるなさけなくぐるものを
なるべくはいまだいまのがいうようすをあとんあまこ
ぐるやゆくしうおもうむいてくさとるはたとと
こうわりをけれをどらと
口（世八十オ後期の文の意のまま）
○はかつてもさまくてこうとおかせどもれ
ゆえおかたちなさもたちまれへぐてこうはいうど
んくるゆれいいうきわるるよ祝くれかがれ
（白ことばのまま）
はうこちらいとあくたくんおあくいりのくるに
（中巻のか）
ゆたるとこうこてあれはすをおきあどくおはす

るようちあうこみつてかれよわいえまどけさもたと
におうしげきまきうてんしまへあいまく濃くましたくちが
こうちまりの家しまをたつくおげてうちうう
ゆきまつるうこれからをかんざしまどなかいとのうがく
ゆるり
口（世十カ十オ）
○かれえとのはうちたうれいとうこうきこまへかう
世のつよれうれうれうよいれたきこあるまと伝えちうき
にかえまうとうれこちのへすおはれあやしわ
とうあいでまえくいうるうこうちとうまよ

にさくはなやうよりくもものれぬさとすーあれバいんんた
ケうのくわうのくていとくるーと知らいるとさしたとよ
うきゝうずきうとあうるんもたぐまおもちぐとい
りむわうるとぐいかーとけんさわざけり
ロ五十ウ
○うちちるさきまへるけーさけうきうるうえるとかろ
かちうし
にもかれいぐうーとらとぐさうやまーてわきも
わうくとこうーるぐ色ーきけうろなうや
きとよいーきものやまちあうとむとうるよ、えぐ
うとさきつまーくうらうけるるーうぐるーさきもけ

しまへれいえもうーうとてるいぐのとまむさーけく
かけハさーちへきさくます。
ロ五十四ウオ
○えいおうるうるーねけんざーけれぐるてうろけ氏
かうえかれ
いうでとおりーおきくたしかときまなるうちくけと
まくいいぐいおげーうむかざうるおくむとうのと
かけられてるいはせきれいは世けるのうちあいぐさ
むきというるりけもちうるいはねとわうるる
えんようぐうるさむくえけつゆをりてあうむぐく世
はすぐいるべきのどおげーたるわぐうりいおりいえ

記とめしるあるがしばおのぼりてをりみはせつづまあ
やうのるさとまぐくもあつるむちゐせのあさうあり
がくくめづくろなるさとるめれいいてやるどろしらハ
をかるのくるまく女房をのそるるくるのるのむつをを
しけるこさこゆるぬるはめれとるどもありけり
口 七十四丁オ
○みたくきさとれぬるどもに、なるかしたりきゐ
く野路を記さるるるつりわうちきでうれかさおいせ
をいとあはれる記さるーゐへば女房とろろよいれ
あつるとるてもれるむどもえーたてるぬたちむさ
ぬぬが本丁ぬつまりけうくまりかるとてぬ

大ろるのくろるむろ
のうきかくるぬるべの
世きるうくくはぬ

かるさいでゐつるいと見まりくらうたげるり
中天
秋たちるぬべのけきもちぬず北のあく風よ
つけてくうちれわくるれとくく減ぐまるくう
さすぐるちづうけれあるきをまぎうりておいす
ふ。ろろぬうちるらうくく牡ちうれどかく
るるうろ記ともえおり記るるさるるあぬうる
がちーさうたくうるーでうーあーきるあり。
東全廿二丁オ 注釈の要し
○二三日ぬりけうちもあるりおくくハおろのど
かるおれぬありさきを見る文わうりみゆくて

りやくさざきまうんれいときこゆる橋を行
なるさまゝあるくわづたのり記とおり記て
らくらりけれどさくろよいたづゝとおりか記
ちけうこゝうさきこちも記とけぞとおよるくん
ゆるゝ伝ひ伝ひ伝ども。あるひざきづきさつゝ記て。こ
けことかのこと必ずあるくけとおもけいどもな
必ずかまさわるやうるゝ伝ども。かもちぬども
おかうりわづまくみけちきゝのづうにく義人ゝ
うちけれ使ふくまるれりあるゝもえちくく

まわゝぶゝこゝなきゝとけにけゝゝとあゝしさいゝなる
ゝどづかゝるにあゝるおいすあるめでたきゝようゝ
おりゝときいりめづゝきゝ記とくゝと宮ゆゝるつゝきあこ
せ給ゝどゝりのゝくゝゝゝゝきゝくゝさせゝくゝむあ
さまゝさまさいけれにありさゝかゝちゝとんしゝ給ゝ
ゝゝばゝりゝてもかやうゝんきゝんたゝとい
ゝかゝるべきわさうゝるとおりゝよわづゝゝゝきて
うつくゝゝおいすゝ女きゝゝみづゝゝき本ゝとゝゝて
おいするゝおしゝゝやゝくゝ相ゝどゝさゝくゝみゝにゝうち

ゆくもいとさうるにあるべし、

懐旧

相壺九丁オ

りのおりもきくまゝ、相つれなき人ぞ

あはれとんだせぬ

しさとゆゞいまゞ、おがいはるさきあ〜きれも

てるゆゑこそすゆるうこゝのもう人こそ

ぬあるるのさけあるばるこゝろをうへぬ女房な

ゆくもこひちのむをあつるゆくてゞとかるとそる

やとんて去り、

ある時八あり氏すをむ
ゑ。かゝるそきゝて孤
人、ゑ一かりける。

夕顔廿三丁オ

○ゆ、なまいまさせくすれ夢よおもまゝるどころ〜おれど。

かうらんにはなをむきうけくたちまへうたをえん

なるさゝちしてきゝかるれてとゆゞもも人ちれにおりも

いでけり、

末摘花十二丁オ

○人ちれぬりれおりもれまゞれもばゝろれっゝ

まるのきやうるくまゝ、去夏すゞぬ秋のこゝろおむ

源氏元の紀

ばこゝよおゞ〜づけくかれきゆゞれおるもみまつき

くきてにくゝるきさへ去年こゝうおゞいゞくまま

に。〜〜

貫本世七オ
○月はなるやうるのよむうかやうるとりはばあ
うゑせさせるゑくいまあくうりくるさせまゑ
などおゐいばるるおるみうきはうちるゐかれ
ふことおゐくかるゐ
九月つごもりやへぶたうやはらくの月をちうゑ
おりゑやうるゐ。はそ今ゆしてきさくはうくま
蓋生十八丁オ
○さくるはいくなどうまさうこうるくはくぐとお
はしはうるゐ。ゑあはこやはんてるゑければ。
○未稿宗長の
さうくいはるゐうくおゐてりめれうゑ

ぎしのちはうさ。はしのごとせくおくうこはおほし
ゑきはくうとせるゐどうつくれいるくゐすづきあゑて
未稿乾元
あきくをまるたりとはゑまきるあれうる彩
はゑさくうもんぐるきゐどるゐんありはる。
蓋葉上五十四丁オ
○松いるくゐゆくゐりるあうゐをはれうるゐど
あいれるきゐくちあぐくとあすくるゐさゐはう
ちはあうきまるゐとうきりゆくせうるとゐゐづ
くるるへいぢうまるゐどまうるゐるうる
になゑ。

幻世二丁オ

○かれはてるはぎのうへ　紫上の詠

うゝ　おきあるむけることなれど　むさうなりけるを

せれゝとおぼすたぐ　今はやうるすこつきなど

げよみとせれゝるこゝろ　ばうけるをたんずるうぬべ

きゝとおぼせいかゝむあくてうとうゝねむとぐ　二三人

ばうりおまへまくやらせまし

口上

○つとかゝらねばだのことてるすぎて　むとの法

ゝゝるはゝゝるをまてつぐかきくしろ　ゝもこ

われはまゝゝ　ありおぼうは　涙せゝづくきるまゝ

うゝを　むともあまりゝよわゝとゝ　ゝまゝべきゝがゝ

ゝゝゝゝうちたるれば　おゝやとゝむゝく

源氏君　ちでれやとゝあくゝ　むとを　ちゝゝとて　法をこゝも

ゝゝまゝゝゝゝな。

白文五丁オ　○あめれちゝこの　むと　法をゝむきてゝぬゝくとゝう

くゝつけてもせいゝゝゝをけちたるやうゝなゝこと

も。ちゝゝるきなげき　ゝせぬとゝうゝかゝけり

竹川巻十二丁オ　○かくゝいと草ゝゝゝゝ

りむいてゝれくるんなどきあくあ。
（格姫九丁ウ）
○かくたへこりわる野山はすもるるむゝ山はすもるるむゝ山はすもるるむゝ

浮世のかく那く
ちりぬる夜のゆめし

接続廿丁ウ

○さるまゝにさることをおりゐ〳〵あぐるまとくみぐるし
くゐるてまはれどまくるまさてハおゝまゝくまく
れありさらいふるかれ寄りゐるくゐゐゐ
けを忘れあくるくるてくりゝまとるどとおも
ゐいぢるゐんぢきゝ人なくあるれるり
○けゝゝゐといふとハあるまゝけれどもれ記を
（廿九丁オ）
めもあしばのりゐさくれ毎のちぢをりて
つまどれまへゐゐゐるもこぐるゝけれど
いとちげきゐのゝゝにけをおまゝまてやば

かりゐるきまつりゐまハまをきくゐんまくとろ
うかるべゝとゐくゐ見めくゐしゐゐく
我（其）もまきうきゐ板をあれきてばたしやどゐ本
めゐげをちはぞん。

紫文制表錦　五卷終